三池にまなぶ婦人集会もいよいよ最後の日の総括集会。一人ひとりが立つて、交流の結果や感想を熱つぽい言葉で述べていた。現実を深くつかんでいてくれたらいいが……。

第七回三池にまなぶ婦人集会

早くも來年の準備へ

足りなかった交流時間

第七回三池にまなぶ婦人集会（労働大学主催）は九日から十一日まで、例年の通り大牟田で開かれ、全参加者は直接三池労組員の家に泊りこみながら組合員や家族と交流を行ない、最後の日の総括集会でしめくくった。今後それぞれに職場や地域、あるいは家庭でどう生き、また闘っていくか意見を出し合い、「決意も新たに」（アピールから）前進していくことを誓い合った。

今年の三池にまなぶ婦人集会には、東京都はもちろん北海道や沖縄からまで、三十九都道府県から谷藤千穂子さん（北海道）ら百一人の婦人が参加した。

母親の多いのがこの集会の何よりの特徴で、右のうち十一人の人が幼な子を連れた母親だった。したがってこれらの人びとの参加はきっと、大きな困難を克服してのことだったろう。何しろ会議や集会に参加するにさえ、泣きすがる子どもを三池主婦会員の手に託しなければならなかった。現に最後の日の総括集会の開会が告げられたときなど、三池主婦会員に託した子どもにそれと気づかれないように、ハンカチや手に持つ本などで顔をかくしては、あたふたと会場（大牟田労働福祉会館の広間）にかけこむ姿が見られたものだった。

さて、労大当事者に「ことし参加者しできた人びとの特徴は？」と聞くのに、答えてくれた。

「この集会が、すっかり定着したことがあげられます。もう、各地のまなぶ友の会では来年参加する人がきまっているくらいです。『自分はいけといわれてやってきた』、といった人が目立った初めの頃とまったく違って、今は『やっと順番が回ってきたので参加できた』という人がほとんどで、しかも出てくるときには、きまって、これまでこの集会に参加した諸先輩からちゃんと導い助言を受けている。ほんとに変りました。

もう一つの特徴は、こんどは一人残らず組合員皆さんの家に泊めていただいたことで、これもこれまでになかったことでした。それだけに、ほんとうの交流ができたものと思っています。

この集会もいよいよ終りますが、も早やすでに来年への準備は始められております。三池労組の皆さんには大変ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いいたします」

また、三池主婦会員も異口同音に「皆さんのまじめさに驚きました。出てくる質問は鋭く、こっちの方が多分に学ぶことばかりでした。二泊三日では時間が足りず、これからは手紙などでさらに交流を深めなければならないと、痛切に思っています」と語っては感動もひとしおのようすだった。

アピール 要約

人間らしく生きることを求める私たちのたたかいをはばむ資本の攻撃は、職場で地域でかけられています。しかし非人間的な資本の攻撃がつよまればつよまるほど、抵抗が生まれてきていることを体験として語り合いました。小さな運動、小さな要求を大事につみ重ねることこそ力になることを、三池のたたかいは教えています。

三池の主婦に学び、たたかいと学習を一生つづける決意も新たに、たたかいを開始しましょう。

年金問題をもっと学習しましょう

三川指導部　斉藤清子

人生わずか五十年、歌われていた昔にくらべ、私たちの寿命も男女ともに七十歳をこえる今日この頃です。しかし超スピードで高齢化が進み、今では高齢者社会といわれています。昭和五十四年現在で、六十五歳以上が八・八％で八百七十七万人、六十年度になると九・七％、七十年度には一二・七％で一千六百七万人、と本当にきびしい老人社会になります。

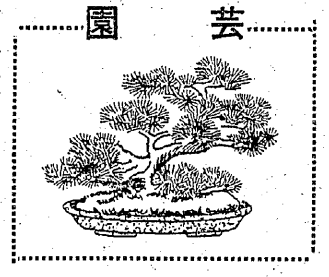
そのような中で子供たちが成人し、結婚しても、現在の資本主義の世の中が続く限り、豊かな、希望のもてる社会のくるはずがなく、子供は二人位いを育てるのが精一ぱい、という世の中は続くでしょうし、それこそ子供の少ないヨーロッパ並みの社会になることでしょう。そのヨーロッパでも、福祉対策はまだ完全とはいえませんが、日本もすでにそのヨーロッパ並みの高齢者社会になってきて居るのです。

何十年も、一生懸命企業で働いて定年退職したものの、さて定年後その高齢者の人たちが安心してくらせるところは、わが国の社会のどこにもありません。医療の問題、住宅や現役でまだ働いている人たちの雇用の問題にしろ、国や地方自治体でもっとよく考えて行かなければならないことが山積しています。憲法にうたわれている「文化的で健康な生活」など夢に見ることさえできません。なんといっても今一番問題なのは、年金ではないでしょうか。働く人の賃金と同じくらい大事なことではないかと思います。考えていただきたいのです、年老いた親たちが、もらう年金で安定した老後生活をしているとしたら、その子供たちは少ない賃金から無理して割いて送金することも必要もなく、子供たちの生活もまたそれだけ安定するのです。

年間八百万人居るといわれる病人も、現金を持たない老人では医者にもかかれず、がまんしながら寿命のくるのを待つほかない例も少くないのです。高齢者の人たちの闘いにより、老人医療無料制度ができたり、年金スライド制が採用されたり、くえる年金に近ずいては居りますが、まだまだ十分でないのです。それどころか制度に無知だったばかりに、思う年金額の半分にしかならず、苦しい生活に落ち込んでしまっている老人もあります。年金制度の仕組をしっかり知って、不当に打ち切られたり、減らされたりして泣かないように、もっと学習する必要があるのではないかと思います。

芸園

松の芽の摘み方は



松の手入れで欠かせないのは、初夏の芽摘みと冬期の間引である。

松の芽摘みの適期――芽摘みのねらいは、大きくわけて①木の伸びすぎを防ぐ。②枝を多く出させる。③葉を短くする事、にある。

まず鉢植と露地植とがあるが、やり方は同じでも鉢物は二十日くらい早や目に実施した方がよく、とくに成長のおそい老木などは早や目に手がけること。

まず木全体をながめ、五～六枝以下だと上下に二回に分け、枝数が多い場合は上中下と三回くらいに分けて実施する。

まず、下の位置の芽の小さいのを、新芽の付け根から切る。その場合古葉は必ず四～五枚以上付けておく。真っ直ぐ上に立ち上がった芽や真下に出た芽などは付け根から切り取り、なるだけ芽が横に広がるようにする。伸ばしたい枝（新芽）は隣りの枝との調和を見ながら、芽の途中から切る（中切り）。そうして主幹に近い方を広く、先端にいくほど小さく、三角形に作り上げる。下の部分の短い芽を切り、成長のよい大きい芽はのこす。

次に、約十日から二週間後に、中または上の部分の新芽（短い芽）を同様に切り、形をととのえる。そして、元気のよい芽はのこす。その時、下の部分の長い芽を摘む。

同じように、また十日から二週間ばかり後に同じ方法で、上部の芽摘みを行なう。

最後に上の部分の、元気のよい芽、または特別にのこした元気のよい芽を摘む。天候、とくに雨期に気をつけ、あまり早くおわった後雨が続けばまた芽が伸びすぎることになり、短葉が出来なかったりする。思い切って切り込み、日光が下枝にも当たるようにすると好結果が出る。

差をつけて摘む理由は、下枝よりも上の方へ、小さい芽より元気のよい芽へと養分は行きわたり、元気のよい芽はあとから追いつくから。

肥料は梅雨期はさけ、六月末頃から与える。

花がおわったサツキは早や目に植え替えをすませ、約二週間後に油カスを与える。梅雨時にはあまり雨に当てないようにして、過湿のための根ぐされ防止を心がける。ケヤキやモミジなどは、七月頃まで芽つみができる。（随時刈り込み）思うような樹形作りをしてみよう。

（三川指導部＝田上　勇・担当）

港務指導部には年じゅう、盆栽が展示されている。これはそのなかの一つで松の鉢。手入れは「これから」とか。